

日本統治期の台湾文学における留学体験

頼 瑞 琴

はじめに

近代化は20世紀の東洋の国々の一番重要な課題であった。そしてその導き手は留学生であった。1900年代の台湾留学生の大部分は資産家の子弟で、年齢も若かったため、民族問題を意識することはなかった。覚醒を促した原因については、『台湾総督府警察沿革誌』では「民族自決主義の影響、之に伴ふ朝鮮萬歳騒動、或は支那革命の新展開等の刺戟を受け、學生の思想傾向は一變し」⁽¹⁾と記録している。1920(大正9)年、林猷堂、蔡惠如らの主導で多くの東京の留学生が集まり、「新民会」を創立した。後、「新民会」の主導者は学生会員をもって別に「東京台湾青年会」を結成し、「新民会」と「東京台湾青年会」の機関誌——『台湾青年』を発行した。これが東京台湾留学生の活動の始まりであった。

本文は日本統治期の留学生によって書かれた小説作品を中心に当時の台湾留学事情について論述していく。作品を通して、留学は留学生にどんな影響を与えたのか、その影響で留学生はどんな変化を遂げたのかを研究していきたいと思う。まず第一章では、留学の背景について簡単に紹介していく。第二章は四節に分け、作家楊雲萍、巫永福、張文環、陳垂映、王昶雄など五人の作品を発表された順番で分析していく。

第一章 日本留学の流れ

1895(明治28)年、下関条約によって、日本は初めての植民地——台湾を手に入れた。抵抗する台湾人を目の前にした日本政府は、「武力」と「教育」という平行する政策を取った。しかし、教育と言っても、植民地を統治するための国語(日本語)教育に過ぎない。植民者にとって、原住民を教育するのは、自分で敵を作ることに等しい。従って愚民政策は日本の植民地政策だけではなく、当時、最多の植民地所有者たる大英帝国の植民地政策でも同様であった。そして、愚民政策の下で、教育機会の不平

等、教育機関の不足などが原因で、留学生増加が起ったと考えられる。

第一節 留学の始まり

1895年6月、台湾総督府民政局管轄下の学務部は伊澤修二学務部長心得によって芝山巖に移り、翌月の16日芝山巖学堂の授業が開始された。これが日本政府による日本語教育の始まりである。最初の学生は二人しかいなかったが、次第に増えてきて、九月の末に二十七名まで至った。そして、台湾人学生として初めて日本に渡航したのは、芝山巖学堂の最初の学生——柯秋潔と朱俊英の二人であった。⁽²⁾日本に滞在した期間は二ヶ月にも達していないであろう。⁽³⁾その翌年の二月、葉樹松、張白堂らも渡航した。だが、この四人については留学生というより、修学生というべきであった。⁽⁴⁾実際に『台湾教育沿革誌』においても、「見学」と記録している。⁽⁵⁾

留学生については「同(1896年)四月一日李春生の子弟李延齡以下七名を東京に留學せしめ」⁽⁵⁾という一文が最初の記録である。しかし、この留学の状況については詳細が不明である。恐らくこのころから、総督府に協力的な「士紳」たちの一部に日本訪問、観光旅行などの動きがあり、次第に私費留学生或は官費留学生による渡航申請がなされるに至ったと推測される。⁽⁶⁾

総督府は本島人(台湾人)に日本訪問・修学旅行をさせ、内地の進歩を見せ、感心させてから、本島人が自ら風俗改良、内地への模倣などのことをするよう誘導することをはかったものであろう。実際に効果があったようである。これによって、初期の留学生は自然的に増加していったと思われる。⁽⁶⁾

第二節 日本留学生の増加

教育における「同化主義」は第4代目児玉総督(1898 - 1905)の時代になって、輔佐役の民政長官後藤新平の「植民地政策はビオロギーである」という漸進主義の下で、差別は続けられていた。⁽⁶⁾そして台湾における台湾人教育は、高等教育のみならず、中等教育においても同じ状況に陥っていた。これについて矢内原忠雄はこう指摘した、「領台当初統治上最も

実用ありし医師養成を除き大正八年に至る迄は全く専門教育機関を有せず、実業学校も欠如し、本島人に対する中等教育も不備であつた。(中略)国語教育と医学、之れ台湾統治の実用上許容せられたる教育の全部であつた」。⁽⁷⁾このような背景の下で多くの台湾学生が本島での勉学を諦め、留学の道を進まざるを得なくなった。下の表の数字を見れば、中等教育を受けるための留学は、高等教育のそれをはるかに上回ることがわかる。この現象はまさに台湾における中等教育の不足をよく反映したものである。

表1 台湾留学生数の推移(その1)⁽⁸⁾

年 度	初等教育	中等教育	実業教育	専門教育	特殊教育	不詳	合計
1906(明治39)	10	9	4	13	—	—	36
1907(" 40)	19	22	14	7	—	—	63
1908(" 41)	23	13	15	8	—	—	60
1909(" 42)	28	30	20	13	3	1	96
1910(" 43)	43	41	23	15	3	7	132
1911(" 44)	65	52	32	18	4	5	176
1912(大正1)	76	94	47	35	2	10	264
1913(" 2)	57	130	75	39	3	11	315
1914(" 3)	47	155	69	45	3	6	325
1915(" 4)	40	179	53	50	2	3	327
1916(" 5)	82	183	74	55	4	17	415
1917(" 6)	83	201	88	86	5	19	482
1918(" 7)	63	200	38	102	19	71	493
1919(" 8)	91	219	46	119	29	60	564
1920(" 9)	94	231	49	139	52	84	649
1921(" 10)	116	297	48	173	58	65	757
1922(" 11)	40	252	46	182	206	17	743

第三節 留学生の監督対策

こうした留学熱は、台湾総督府の危機感を引き起こした。最も恐れていたのは留学生による反植民地政策の言動である。総督府が留学生に「留学後の成績を顧みると、法政の學を修めた者等は兎角輕佻浮薄、忠實業に服するの風なく、言動ややもすれば常軌を逸し、甚だしきは對岸に走り官吏となる者をさへ生ずる。」⁽⁹⁾と警戒した。そして、「元來國語及普通

學の素養に乏しい本島人を何等の制限もなく内地に任意留學せしめる事は、徒に社會の惡風潮に感染せしめ、一身を誤り、社會を害し、延いては本島施政上にも障礙を來す結果となるので」⁽⁹⁾、1907(明治40)年5月31日休職国語學校教授石田新太郎を留學生監督に任命した。監督の任務は以下のようであった。

- 一 在京本島人生徒の監督指導に任ずる。
- 二 毎月少くとも一回留學生の會合を催す。
- 三 毎三箇月に一回各生徒の修學の狀況性行・成績、前途成業の見込等に關し意見を附し報告書を提出する。
- 四 留學生の監督指導に關し、必要と認むる所置を執る。
- 五 留學生の監督指導方に關しては、東洋協會並當該が學校と連絡を圖り、遺憾なきを期する。⁽⁹⁾

なお、「東京以外の各府縣留學生監督に關しては、地方長官に依頼し、必要の取締を行ふ事とした。又島内各廳長に対しては、六月五日附を以て、自今内地へ留學する生徒あるときは、其の氏名生年月日、種族の別、入學すべき學校の名稱及所在、修業學科、入學前の教育、父兄の生業及資産の狀況等を具し、其の都度報告せしむる事とした。」⁽⁹⁾留學生への監督は、1912(大正1)年9月の高砂寮の落成により、さらに嚴密となった。このような“監督”の結果、「本島人はたゞに台灣に於て専門教育を受くる機關を有せざりしのみならず、大正八九年頃に至る迄はその内地留學をも、殊に法律政治の勉學は、官憲の妨害を受けたのである。」⁽¹⁰⁾

第四節 日本留學生の推移

1922(大正11)年の教育令によって「同化教育」から「共学」の制度に轉じた。この「共学」制度の公表によって、一時期台灣の留日學生数が減っていったと思われる。1923(大正12)年と25(大正14)年の留學生数の数字を見ると、これがわかる(表1、表2を参照)。しかし、この内台共学制度は台灣人に教育機会をもたらすかわりに、日本人による高等教育機關独占を実現させることとなった。台灣の人々がこの事実に気がつかないわ

けがない。そこで、1927年には留学生数が一気に増えることとなった。
それ以後、留学生の数は減ることがなく、増える一方であった。

表2 台湾留日学生数の推移(その2)⁽¹¹⁾ * () 中の数字は女子の数

年度	小学校	中学校	女学校	実業 学校	高校・ 大学予科	専門・大学		特殊 学校	その他	合計
1923	39 (3)	272	19	52 (1)	73 (1)	165 (4)		224	18	862 (28)
1924	37 (4)	272	20	45 (1)	77 (1)	145 (2)		233	21	850 (28)
1925	21 (2)	263	12	36 (1)	114 (1)	123 (6)	29	190	40	828 (22)
1926	18 (1)	244	9	36	75	153 (11)	71	164 (1)	115 (4)	886 (26)
1927	16 (2)	419	22	55	147	260 (18)	121 (2)	95 (1)	105 (2)	1240 (47)
1928	18 (2)	516	28	86	153	296 (34)	121	95 (1)	92 (1)	1405 (66)
1929	20 (1)	630	31	90	179	251 (33)	103	71 (1)	74 (3)	1449 (69)
1930	22 (3)	495	19	79	170	246 (31)	132	67 (5)	87 (10)	1317 (68)
1931	28 (4)	578	37	119	155	296 (64)	148	46 (5)	94 (5)	1501 (115)
1932	34 (5)	555	31	108 (2)	124	330 (73)	184	52 (3)	209 (6)	1627 (120)
1933	28 (4)	514	23	79	105	310 (87)	193	72 (5)	196 (6)	1520 (125)
1934	略	545	37	136	161	636 (152)	197	254 (20)	11	1977 (209)
1935	略	601	31	190	139	691 (146)	217 (12)	300 (12)	16 (2)	2185 (203)
1936	略	733	43	188	149	747 (181)	205 (3)	292 (15)	略	2357 (242)
1937	略	829	76	217	154	880 (229)	211 (2)	445 (23)	略	2812 (330)
1938	略	1197	101	352 (24)	145	1250 (291)	313 (1)	略	765 (115)	4123 (532)

1939	略	1635	148	478 (16)	177	1554 (343)	337	略	1078 (164)	5407 (671)
1940	略	1541	185	544 (20)	201	1798 (360)	310 (1)	略	1436 (161)	6015 (727)
1941	略	1556	267	634 (31)	249	1992 (352)	303	略	1675 (182)	6676 (832)

第二章 作家別で見る留学生像

本章では四節に分けてそれぞれの特色について論述していく。まず、第一節では1920年代と1930年代の代表として楊雲萍と巫永福を挙げ、二人の違いを比較することによって、留学生のアイデンティティ、心境の変化を探る。第二節では張文環の一連の留学生の帰郷を語る作品を通して、留学生を悩ませる失業問題を取上げる。第三節では陳垂映の『暖流寒流』を通して、その中に登場する留学生たちを分析する。第四節では王昶雄を取上げ、皇民化運動下の留学生の苦しみを通じて、30年代の留学生との違いを論述する。

第一節 楊雲萍と巫永福

一 楊雲萍の場合

楊雲萍(1906 - 2000)は1926年から1931年にかけて留学のために故郷を離れ、東京に出た。留学中、楊雲萍は合計六編の短編小説を発表したが、そのうちの三編は留学を背景にしたものである。⁽¹²⁾1926(昭和元)年4月に発表された「到異郷」の主人公はただ一枚の「文憑」を得るために、家族や恋人と別れ、日本へ向かった。船の中でひどい船酔いに堪えながら、「人生的幸福在那裏?……呵呵!為著一紙的文憑,和慈愛的父母弟姊相離,和幾多畏敬的心友相別,和那山川草木,更和那幾多帶不得來的書籍雜誌相分開……。」⁽¹³⁾と家族や友人、恋人のことを懐かしく思う。「到異郷」は連載予定のはずだったが、初回で打ち切られた作品である。作者はこのことについて、この作品にあまりにも気に入らないので、連載することは望まないと説明した。⁽¹⁴⁾同年8月に発表された「弟兄」では兄弟喧嘩の後に兄が片づけながら、と故郷を懐かしく思う場面がある。

「念什麼書！」

「來這兒東京做什麼!?」他半自棄地這樣自言自語。

一面整頓那被擠下來的雜誌報紙等，一面追想在臺灣家裏時的情景——小溪裏的摸魚，竹仔山的吃龍眼，晚飯後的談笑等。⁽¹⁵⁾

「到異鄉」と「弟兄」は楊雲萍が東京に来て一年目に発表したもので、郷愁の色は濃く、留学すること自体まで疑わしく思えてきた。だが、時間が経つにつれ、現実的な問題に向かわなければならなくなった。1927(昭和2)年1月に発表された「加里飯」では、郷愁に代って苦しい経済状況がテーマになった。「聽着一聲『掛號』的郵差的叫聲，宛然似在灼熱、迷茫的沙漠當中，聽到『快要到綠洲Oasis了』的隊商Caravan，感覺愉快、滿足和安慰。」⁽¹⁶⁾そして、為替手形の金額を見て「那刹那、先前的愉快、滿足、和安慰、頓然地大部分消失，再加上着急起來。」⁽¹⁶⁾為替手形と一緒に儉約しなさいという父からの手紙をもらった主人公は悲憤、不安を感じながらも、一家十人の生活のためにコマのように回りつづけている哀れな父親の姿を思わずにいられない。鬱憤を晴らすために普段は絶対入らないカフェーに入っても、貧乏学生ということを余計に強く意識させられただけである。

また、作品の中で東京に関する描写も我関せずというふうに描かれている。

他的眼睛瞧不瞧地望著夜裏的東京市——夜裏的東京市，却脫不盡白晝時的喧囂，幾多電燈在黃塵濛濛裏，車馬轟轟裏明滅。」（——「弟兄」）⁽¹⁷⁾

楊雲萍の作品から留学の楽しさが見出せない。楊雲萍は貧乏と異郷にいる二つのことを強く意識し、そして傍観者の見方で意図的に自分と東京との間に距離を置き、台湾(被植民者)と日本(植民者)との間の違和感を表現した。こうしてそれとなしに抗日の色彩を作品の中に入れたのである。

一巫永福の場合一

1933(昭和8)年7月の『フォルモサ』創刊号で発表された巫永福(1913-)の「首と體」の世界は、楊雲萍とは全く異なるものである。巫永福は1929年16歳のときに名古屋五中に編入し、1932年、明治大学文芸科に入学。創作欲が旺盛な巫永福は自分の作品の発表できる場がほしくて、張文環に相談を持ち込み、ようやく念願の雑誌——『台湾芸術研究会』の機関誌として『フォルモサ』が創刊された。巫永福は明治大学在学中、三年目のクラス分けの際に新感覚派の代表者である横光利一のクラスを選んだ。彼の作品には、新感覚派の影響が見られる。もちろん、「首と體」もそうである。「首と體」は主人公の「私」の親友のSの直面する問題を巡って構成されたものである。

ある午後「私」はSと帝国ホテルで上演中の「桜の園」を観に行くために、東京の街を歩いていた。冷たい風の中を歩いている二人は殆ど言葉を交わさないが、二人は同じことを考えている。それはSの「首と體」が引き裂かれそうになることである。Sの「首と體」という悩みの発端は故郷から度々来た手紙であった。

事實私共は近日中に別れねばならぬと私は思つて居るが彼は別れたくないと考へて居るのだ、首と體の相反した對立である、何故なら彼は東京に居たいと願ひ、彼の家では彼の體を要求して居るからだ。「歸郷せよ」とは屢々彼の家から手紙で要求して居る。その原因はと言へば重大なる結婚(ママ)問題である。それで彼は東京に居たいと考へて居る。⁽¹⁸⁾

「東京に居たい」彼に対して、家族の「歸郷せよ」という要求はまさに彼の精神——「首」と「體」を引き裂こうとしている。「私」は偕行社前の獅子の首と日比谷で見た羊の首を見て、Sの首と体の悩みについて矛盾を感じた。

平和な羊と強猛な獅子の首は妙な對象をなして來た、錯然とした氣持で妙な所に根據點を得やうと思ひ、解釋の出發點を得やうとすることは數々あることだが實にこの時の氣持は之であつた、羊と獅子の對象から何かしら解釋點を與へやうと思つた。⁽¹⁸⁾

「私」は対立している両者を引き合わせようと努力した。しかし、結局「その解釋がどんなであつても自己満足とこぞつけ性が妙に浮き立つて来てそれを決めたがるものであるから」⁽¹⁹⁾に過ぎなかった。

食事するために入った店の中で、テーブルの上にある鈴を見て、「私」は再び獅子の首と羊の首のことを思い出す。獅子の頭を持っている羊の体と獅子の体に羊の頭をくっつけた二匹の怪獣が「私」の脳から離れようとはしなくて、加速度的に走ってきて、烈しく衝突してきた。猛烈な衝突に堪えられない「私」が目をつぶると、エジプトのスフィンクスが現れてくる。

私はスフィンクスを考へた、何故スフィンクスがあつたのだらうと、スフィンクスはかつて或る王に依つて謎をかけられて居る、すると二匹の動物が一匹になつて何とも分らない胴體が兩端に獅子と羊の頭をつけて居る、——これが人間といふものだらうか。⁽²⁰⁾

自分の意志と家族の望みが対立していることを意識している主人公は頑張つてその対立の關係を合理的に解釈しようとした。しかし、どう解釈してもこじつけにしかない。結局、人間(留学生)はこのような首と体が引き裂かれる状況に陥り、新社会と旧社会の価値観の中で綱引きをしなければならない宿命ではないかという結論が出される。

「首と體」以外に、「山茶花」も留学生を主人公にした作品である。「山茶花」は台湾の婚姻問題を批判する作品である。主人公の龍雄は恋人に約束をすっぱかされた日に偶然幼馴染の秀英と再会した。何回も会っているうちに龍雄と秀英の間に、愛が芽生えた。だが、二人の間には同姓の結婚を許さない台湾社会の旧習俗が横たわっている。「山茶花」は「首と體」のように留学生小説としての色彩がはっきり見られない。しかし、巫永福の筆の下の子は常に旧社会のしきたりと戦う運命を背負っていることがわかる。そして、東京にさえいけば、暫く嫌なことから逃げられるという設定から見れば、巫永福は東京と台湾に格差をつけた。新しい教育を受けてきた留学生の価値観と旧社会のしきたりに縛られる台湾人の価

値観が、現代化の代表地——東京でぶつかる。

もし、楊雲萍の作品が20年代の留學生の心理を代弁したものとすれば、巫永福の『首と體』は30年代の留學生の心理を代弁したものであろう。楊雲萍は日本と台湾が対等の立場であると認識しているが、巫永福はそうではない。巫永福の描いた留學生は現代の教育に対しては何の抵抗も感じていない。それだけではなく、異郷にいる郷愁さえ見られない。この傾向は同じ時期に留学している張文環の作品でも見られる。同じ近代化された東京を見て、なぜ楊雲萍と巫永福とにはこのような違いが出るのであろう。陳建忠氏が「台灣留學生小説中の留學生菁英、適足以因其與『内地』同步的『現代化』視角，而益顯台灣知識份子，在文化認同及身分認同上的轉變軌跡。」⁽²¹⁾と説明した。

第二節 張文環——理想と現実のギャップ

1909年、張文環は嘉義県梅山で張察の長男として生まれた。公学校を卒業して、1927年日本に渡り、岡山中学に入学した。1931年東洋大学文学部に入学したと見なされている。張文環はどんな形で東洋大学に入学したか、未だにはっきりしない。最も新しい張文環の年譜は『張文環全集』第八巻に収録された「張文環生平写作年表」である。そこでは東洋大学文学部、或は予科に入学したと記されている。入学の形はともかく1931年から1937年まで張文環が東京に滞在したことが確かである。

長男として生まれた張文環はプレッシャーを背負っていたのであろう。彼の作品をほかの留學生たちの作品と比べると、明らかに失意の留學生にほかならない。長男としての責任、留學生のプライドが彼を苦しめた。文学系の彼は当時前途があるとされた医者でもなければ、弁護士でもなかったため、故郷に錦を飾ることができなかった。家族の期待に答えられない上、帰郷後の就職への不安が波のように彼に襲いかかってきた。「父の要求」の陳有義、「地方生活」の澤、「土の匂ひ」の吳清輝らの帰郷はまさにこのことである。

張文環の作品の中で始めて留學生が登場したのは、『フォルモサ』創刊号に発表された処女作の「落蕾」である。「落蕾」は農業青年の義山の恋人の秀英が家族に勧められた縁談を受けるために、義山に別れを告げた。

ショックを受けた義山が留学生である友人の明仲の力を借りて、前から願っている留学を実行する。作品の中では義山の友人の明仲について、没落していく資本階級の家の出身で、帰郷をせざる得ないときに自殺を考えたと書かれた。

「落蕾」について、1935(昭和10)年1月『中央公論』の懸賞小説の選外佳作に選ばれた「父の顔」を改作したとされた「父の要求」では、張文環の影として、留学生の主人公陳有義が登場する。「父の要求」は1935年9月に『台湾文芸』の第二巻第10号で発表された。自伝色彩が濃いこの作品の時代設定は最後の帰郷後の時間を入れずに1932(昭和7)年の年末から1934(昭和9)年までの二年間弱の間である。卒業を控えている陳有義は自分の将来に不安を感じている。高文試験に落ちた彼は本郷の下宿を離れ、中野の沼袋に引っ越した。次第に彼は下宿先の娘——賀津子に好意を抱くようになった。恋の力で彼は初めて悩みを忘れることができた。だが、これも束の間のことだ。同郷の後輩と再会したことをきっかけに陳有義は社会主義の道を歩み始める。社会主義運動で突っ張っていた彼は牢屋で自分の生き方について見直す機会を得た。そして見直すことによって、彼は下宿のおばさんの親切によって人の温かさを感じるようになる。同じ部屋にいる泥棒の姿を見て、その男の生き様を考える。

この人は生きるために命がけで屋根から屋根を傳はなければならない。阿義はその姿を考へて見ると、どうしてもこの人があゝ云ふ姿を出せるやうな男には見えない。しかし自分よりも逞ましい腕力と食慾を持つてゐることは疑ふことができなかつた。さうすればこの男の生きんための努力、そして自分、と彼はこれに善惡をつけなければならぬのだ。——と思ふと彼はにはかに先を考へるのが臆(ママ)劫になり、良心のために屋根から屋根を傳ふことができなかつたら、人間としての生甲斐、或はこの男よりも下等な人間になるのかも知れない。この人はいやしむべき人か、いやしむべき人は生の意識を失つてゐる人間だ。希望のない人の生活だ。この人達は救はれる。⁽²²⁾

後輩林君の転向を知ったときの鋭い感情と牢屋で泥棒をみたときの寛

容な態度を比べれば、心境が変化していくことがわかる。

現実と理想のギャップで苦しむ陳有義が両親の「汝若有念父子之情、千萬先解決汝父母之苦、然后再決汝之主張可也。」⁽²³⁾という願いに従って帰郷する。帰郷後の陳有義の生活はやはり彼の心配通りの失業から始まる。

僕の生活は毎日書物を讀む以外に何もする事がない。最初は毎日父や母に世間話を聞かせたり、或はこれから先の自分の身の振り方をきかせたりして出来るだけ安心させるやうなことばかり並べたてゝゐたが、此頃は父や母も幾らかわかつてきたと見えて溜息をついたり呟やいたりしないやうになつた。しかし今度困つてしまったのは僕ですよ。僕ですよ。毎日手持無沙汰ばかりしてゐるやうな氣持です。⁽²⁴⁾

このような苛立ちは「地方生活」、「土の匂ひ」でも見られる。「地方生活」の主人公澤は東京から故郷に戻り、今の自分の置かれている状況を考える。

都會を切り離して、澤は生活できるだらうか、彼は都會に勤めて田舎に故郷を持つてゐる誇らしさばかり思つてゐたが、故郷にゐて都會に職を持たない悲しさを考へてみたことがなかつた。しかし大學を出て、あくせくと職を求めてゐたが、揚句の果ては行李に書物を詰め込んで故郷にかへつてきた。そして故郷の人は王主定の息子書物を積んで故郷に歸へると云つた顔以外に、何も澤に示さなかつた。⁽²⁵⁾

息子の悩んでいる姿を見た父親が「一年や二年遊んだ(ママ)つて、わしには理解出来る。男と云ふものは待機の姿勢と云ふものがあり、また進退と云ふ言葉もある。」と息子を慰める。

「土の匂ひ」の主人公清輝は失業の不安を抱えて十年近く東京にいた。急に故郷から帰郷せよという電報を受けとったとき、彼は自分の置かれている状況を改めて考えずにいられない。

家事上のことでぜひ歸郷せよといふ電報をうけとつたとき、彼は絶対絶命の思ひで、改めて己の姿を省みないではゐられなかつた。そして、彼は始めて己の惨めな姿を見出したのだつた。といふのは、人は敗けたと意識したときに、始めて自分の惨めさを自覺するものである。(中略)留學生の歸郷といふことは、つまりはその人の留學中に於ける成果の總決算を否應なしに強ひられることだからである。人は故郷に錦を飾つて歸るといふが、己は一體何をもつて錦とすると考えると、清輝には堪え得られなかつた。醫學博士か、そこまでゆかずともせめて醫者か、それとも辯護士か、成金か、そのどちらでもない。ただ卒業證書を持つて歸るだけにすぎない。⁽²⁶⁾

清輝の惨めさは故郷に錦を飾れないことである。清輝は留學生の歸郷を留學の成果の總決算だと考えている。「父の要求」の将来に対する不安から、「地方生活」の待機の姿勢、「土の匂ひ」の總決算まで、残酷な現実はいつまでも留學生を襲う。留學生としてのプライドが世間体に敏感に反応し、今まで頑張つて勉強してきたものが生活の足しにならないことをいささかの後悔を混じえたように見える。張文環の留學生の歸郷を語る一連の作品を見て、張文環が文芸の道に入ったことを後悔しているのではないかと思わざるを得なかつた。

第三節 陳垂映——『暖流寒流』の中の留學生

陳垂映、1916年生1月1日に台中豐原市に生まれる。本名は陳瑞榮、戸籍名は陳榮である。1933年4月に早稲田大学第二高等学院文科に入学し、35年3月卒業。36年から39年まで早稲田大学専門部政治經濟科に学び、40年台湾に戻る。1936(昭和11)年台湾文芸連盟によって出版された彼の長篇小説『暖流寒流』は台湾文学史上、日本語で書かれた二冊目の単行本である。

『暖流寒流』以外に、陳垂映の小説作品について、現在見られるのは、短篇の「哀春譜」、「麗秋の結婚」、「失踪」、中篇の「鳳凰花」の四篇である。そのうちの「麗秋の結婚」を除いて、各作品では留學生を主人公にしたり、留學の問題を扱ったりした。陳垂映は早熟な作家である一方、文学者と

しては短命で、1933年17歳のときに処女作を発表してから1942年まで、十年足らずの作家生命である。1935(昭和10)年5月『台湾文芸』第二巻第5号に「哀春譜」が発表されたとき、わずか19歳であった。恋愛・婚姻の問題は陳垂映の作品に欠かせないテーマである。

『暖流寒流』は1935年に早稲田第二高等学院文科を卒業したあと、早稲田大学専門部の受験準備のために帰国した間に、書かれたものである。早稲田第二高等学院文科に入学した陳垂映が暮らしに困っている作家たちの姿を見て、いろいろ考えた結果、生計を立てるために文科から経済科にかわることに決めた。⁽²⁷⁾父親の反対を押し切り、台湾を救う使命感を持って経済科に入る主人公の俊暁が、陳垂映の理想の留学生像である。生計を立てるために、経済科に転ずることにした陳垂映は、自らの希望で経済学に進む主人公にたびたび理想の溢れる言葉を感情を高ぶらせてしゃべらせた。それらの言葉は台湾留学生に対する期待であり、またこれから経済学の方角に進む自分の目標でもあろう。

『暖流寒流』は四人の内地留学生をめぐる話である。主人公はある地主家庭の長男、K大学予科に留学する俊暁である。舞台は台湾のある農村と東京である。作品の中で留学生は二つのタイプに分けられている。一つは台湾の将来のために、青雲の志を抱いて真面目に勉強する主人公の俊暁と親友の明秀のような留学生で、もう一つは秋祥のような裏口入学で医学専門学校に入り、遊び三昧の留學生活を送る留学生である。

俊暁と秋祥は同じ学問を商品だと考える親を持つが、二人の価値観はまったく違う。俊暁は台湾の人々の教育観の盲点を見抜き、父親の望んだ医科、法科のどちらでもなく、商人になる。俊暁の考え方は中学から卒業したばかりの青年の考えにしては少々強引などところがあるけれども、作者の理想をうかがうことができる。

好きでもない方面に、自分は己れを殺して進む気にはなれないし、(中略)自分は世間體なんかどうでもいい。自分の為、自分の行く道を自ら選ぶべきである。(中略)小賣商人の様な惨めな商人にはなりたくない。もつと大きい仕事、充分に自分の才能を伸ばし得る仕事、そして五百萬島民に幾何かの利益のある仕事、自分はそんな仕事が見たい。

その一方、秋祥は父親の希望で、医専の入試を受けるために、上京せねばならなくなった。しかし、モダンボーイである秋祥は都会としての東京しか頭に入らない。

「東京つていゝ處だよ。映画も封切の奴が見られるし、少女歌劇もたと見られるよ。それに、遊ぶ處がいくらでもあるんだよ。一度位東京に行つて來ないと、新しい女性なんて言へないね。」⁽²⁹⁾

上京した秋祥は思うまま遊びまわり、裏口入学で医専に入る。そして恋人に問い詰められて次のような言い訳をする。

「それは、碧茹さんの言ふ様に、堂々と實力で入學するに越した事はないよ。だが僕があんな真似をした日にや、百年経つてもうかりつこないよ、あんなのは貧乏人の兒のやる事さ。苦心して入學するに比べれや、三千圓は安すぎる位だ。目的に達する為に、僕は手段を選ばないよ。結局結果に於ては同じさ。(中略)この方が受験準備よりもずっと樂で確實性もあるからね。これで卒業して一人前の藪にでもなれや、三千圓なんて他所の人が出して呉れたも同様だ。」⁽³⁰⁾

秋祥はどんな手段でもかまわない、医専を卒業して医者になれば、元は取り戻せるという都合のいい算盤をはじいたわけである。

登場する留学生の中で唯一ブルジョア階級出身ではない明秀が中学卒業ということは、進学不可能と幼いときから買われてきた「息婦仔」と結婚させられるという二つの現実と直面することになる。俊暁の援助で両親に黙って上京した明秀が夜の銀座をみて、都会に愛想を尽かした。東京で自分の求めている美を発見できなかった彼は街に出なくなり、自分の下宿から学校までの東京の様子しか知らなかった。当時、明秀のような勉強し olmayan タイプの留学生を作品で扱うものは少ない。

恋人の秋祥に勧められて碧茹は両親に黙って一人で秋祥のいる東京へ

飛び出し、女子医専に入る。小説の中で碧茹以外にも玉雲という碧茹と同じ医専の先輩が登場する。玉雲も失恋と自殺未遂を経て、医学に専念するようになった。第一章の台湾留日学生数の推移表(表2)の留学生の合計数字を見ていくと、女子留学生数の増加がわかる。1923年度では女性の人数がわずか28人、全留学生人数の30分の1であるが、『暖流寒流』が発表された年の1936年では242人に増え、全留学生数の十分の一まで成長した。在籍人数が一番多い学校も1923年の女学校から、専門学校に変わった。陳垂映の作品ではよく自殺を取上げる。このように主人公が自殺未遂したことで、新しい人生(=正しい人生)を歩むようになるのは若き作者の一種のロマンであろう。

『暖流寒流』の中の留学生は台湾留日学生の実情を反映したものである。墮落した留学生を描き、大いに批判することは陳垂映の作品の重要な課題の一つである。

島からの留學生は實に夥しい數に上つて居る。けれども彼等の内で、真劍に勉學をしようとする殊勝な心掛けのある者は、果して幾人居るだらうか。(中略)留學生達は、何もしないで暮して居る者は殆ど居ない。皆一藝一能に秀でた人達である。勉強するか、然らずんば遊んで暮らすか。(中略)留學か?流學か?彼等が次の時代の島を背負つて立つのかと思へば、島の前途も寒心に堪えない。こんなのが留學生の八〇パーセントを占めて居る。親の脛は甘い。だが噛ちられる方に見れば辛いものだ。⁽³¹⁾

『暖流寒流』より一足早く1936(昭和11)年4月に『台湾新文学』第一巻第3号に発表された「失踪」の中でも、喜泉という秋祥に似た留學生が登場する。さらに1940(昭和14)年、『台湾新民報』に連載された中篇小説「鳳凰花」でも李石雲という女癖が悪い画家がいる。葉山の貸し別荘で孤独に死を迎えようとする李石雲についてこう書かれている。

彼の三十八年の生涯は繪と酒と女の歴史であつた。彼から繪を描く才能を除けば、彼は全くのやくざな男でしかなかつた。彼は余りに、自分の

才能と美貌と肉体を駆使し過ぎた。併し彼の愛した多くの女又彼を愛した多くの女も今死を待つ彼の枕頭には唯の一人も待つてゐない。⁽³²⁾

「失踪」や『暖流寒流』では、墮落した留学生を批判したものの、その報いについて言及しなかった。それから、4年後の「鳳凰花」によって、作者は李石雲の境遇を通して、正義を果たしたとも読める。

『暖流寒流』の題名については、『陳垂映集』第二巻に収録された趙天儀の「陳垂映生平小伝」では陳垂映にインタビューしたところ、寒流は異民族(日本)の統治のことを指し、暖流は被統治者(台湾)の新しい希望であることを指している。⁽³³⁾そして暖流というのはまさに俊暁のような台湾青年を指している。

第四節 王昶雄——皇民化運動下の留学生

王昶雄、1915年2月生まれ。本名は王榮生、台北淡水出身、2000年の元旦、胃癌で亡くなった。1928年、淡水公学校を卒業し、台湾商工学校に入学。1932年台湾商工学校を卒業。1933年日本に渡り、郁文館中学に入学。⁽³⁴⁾1935年日本大学の予科文科に入学。1937年、予科を卒業し、同大学の文学部に進学したが、将来の生計を立てることを考え、38年、同大学の専門部歯学科に再入学した。42年、卒業とともに台湾に戻り、淡水で歯科診療所を営んだ。第二次世界大戦後、言葉の壁でしばらく創作がなかったが、50年代後半から再び創作しはじめ、中では随筆の数が一番多い。現在に見られる小説は、『王昶雄全集』に収録されている中篇の「淡水河の漣」、「梨園の秋」、「奔流」、「鏡」と短篇の「出戻り娘」の五つの作品だけである。

「奔流」は張文環の奔走によって1943(昭和18)年7月、『台湾文学』第三巻第2号に掲載することができた。太平洋戦争中のことであって、不当とされたところが当局に直されたり、日本を謳う文章を入れられたりもした。⁽³⁵⁾主人公の「私」が父親の診察所を継ぐために帰台する。内地の生活が懐かしく、地味な開業医に退屈していて、再び上京しようと思ったが、母親のことを考えるとどうしても決心がつかない。そのとき、伊東という中学校の先生に出会う。伊東は台湾人であるが、日本人妻を持ち、義

母と同居していて、生活習慣は完全に日本式であって、日本語しか使おうとしない。その伊東の生き方を見て、「私」の心境が変わっていく。「私」は最初のとき、伊東の徹底的な日本化(皇民化運動)に感心した。だが、日本人になりきるために実の父母を捨て、その罪滅ぼしで苦勞して白髪だらけの伊東を見て、矛盾を感じた彼は「それでいいのだ、それでいいのだ」

(36)と自分に言い聞かせるしかなかった。

作品は主人公の「私」が東京を離れたときの気持ちを語るところから始まる。

私は十年間住み馴れた東京を後にしたのは、三年前の春であつた。今でも目を閉じると、當夜のことがまざまざと思ひ浮かべられる。九時發の長蛇のやうな下關行夜行列車が東京驛頭を離れて、有樂町、新橋、品川、大森といふ風に、巷々の灯が次々に見えなくなつて行つた時、さすがに熱いものが胸にこみ上げて來るのをどうすることも出来なかつた。離情のいたましきと云ふよりは、自分は一旦郷里へ歸つたら、又いつの日に再びこの帝都の地が踏めることやらが、私には堪えられなく淋しかつた。(37)

父親の急死によって、帰郷せざるをえない「私」にとっては、「又いつの日に再びこの帝都の地が踏めること」、「父の後を繼いで、一生を田舎醫者として埋もれる」のは、耐え難いものである。張文環と違って、医学の道に進んだ王昶雄が生活の保障ができ、作品で将来に対する不安が見られない。留学地から離れたくない留學生の気持ちは30年代の作品でよく見られる。この傾向についての原因は現代化の代表——東京に惹かれたことと、封建社会である台湾から逃げたい気持ちであろう。しかし、「奔流」となると「内地化」(日本化)に変わってきた。

十年間に亙る私の内地生活は、決して楽しい思ひ出ばかりではなかつたが、私はほんとうの日本美を見出し、藁に包まれたやうな温い人間味に觸れ、憧れ以上にもつともつと高い理想に接したやうな精神を根抵(ママ)から揺り動かしてくれる事柄を體驗したのは、その間に於てであつ

た。⁽³⁸⁾

「奔流」の書かれた時期は「皇民化運動」の最中にあるので、そのまま真に受けるのは誤解が生ずる可能性がある。しかし、当時の一つの現象として受け止めれば、その「内地化」の過程がわかってくる。「内地化」は、「皇民化運動」の推進の「成果」の一つであり、留学生が日本を含めて近代の学問から、純日本的なものに移った。30年代前半の日本を通して近代の学問を学ぶに対して、「奔流」は日本そのものを学ぶこと、内地化していくことに変わった。

自分は南方生れの一日本人として甘んずることが出来ず、純然たる内地人になりすまさねば気が済まなかつた。進んで内地化しようと努めるのではなしに、無意識のうちに内地人の血が自分の血管に乗り移り、それがいつの間にか静かに流れてゐるといつたやうな氣持であつた。⁽³⁸⁾

勿論、このような「内地化」は不平等な立場を意味する。被支配者としての劣等感が消えることがない。主人公の「私」は日本にいたとき、故郷を訊ねられると、四国か九州と答えてごまかす。また、日本名の仮名さえつくって内地人になりすまそうとした。訛りがひどい友人と一緒に出掛けるときに台湾人であることが感づかれるのを恐れていた。そしてそのいつか気付かれるのではないかという不安の中で、十年間絶えずに神経を尖らせていたのである。

「御郷里はどちらですか。」と訊かれた時に、いかなる心理の作用であらうか。大ていは四国か九州と答へた。なぜ私は言下に「臺灣です」と答へるのを憚つたのであらう。だから私はいつも木村文六といふ假り名を振り翳して行動せねばならなかつた。(中略)だから郷土訛り丸出しの友人と一緒になつてゐる時は、臺灣人だと感づかれはせぬかと、私はひやひやせねばならなかつた。(中略)私はかうして十年の間、絶えず神経を尖らして居たのであつた。⁽³⁹⁾

「鏡」の主人公洪秋文も「内地化」によって、自信を得る。洪秋文は哲子という台湾生まれの日本人女性に好意を持っているが、友人の気持ちを知っている彼は友人に気兼ねし、また台湾人である自分に戸惑いを感じ、なかなか行動できなかった。

長い間内地に於て教養されたこの顔附は、内地人と区別のつかない錯覚を起させるではないか。そしてこの口許からすべり出る言葉も、ちやきちやきの江戸辯である。「山」と云へば、たちどころに「川」と進り得る。また能や歌舞伎をも一通り鑑賞するし、極彩色の類で飾りたてる寺廟よりも、社の素木の御殿にあらはれるその簡素明快な造形精神に、却ってひしひしと美的感覚を打たれるのである。これ位の道具立てさへ備はつて居れば、哲子との結婚は申し分がないではないか。いかなる關所が前方に待ち構へて居らうと、かうした一つの動かし得ない信念をもつて当るんだ、と思つた。⁽⁴⁰⁾

洪秋文はより日本人に見え、より日本文化を身につけることから、自信を得る。その自信のもとで、日本人である哲子と結婚する資格があると自分に言い聞かせる。また、学歴に対する自負心も見られる。

東大出の法學士、おまけに高文パスといふ金的を在學中に射止めた果報者が、数々の思ひ出を内地に残して、今まさに故郷の地を踏まうとしてゐる。いろんな希望が、まるで雲のやうに湧いて来る。⁽⁴¹⁾

台湾に着いて、洪秋文はさっそく一足早く帰台した哲子の家に向かう。しかし哲子が仕事で不在、洪秋文は哲子に手紙を出すことにした。待ちに待った哲子の返信は一生を仕事に捧げ、誰とも結婚しないという内容である。手紙を読んだ洪秋文ががっくりする。

東大を出、おまけに高文までパスした男のもつてゐた学問も、どうやら一人のうら若い女性の、亂麻を斷つやうな鋭利なる理性の前には、氣力がないやうである。⁽⁴²⁾

皇民化運動下の留学生のアイデンティティは致命的な打撃を受けた。40年代に入ると、30年代の日本を通して現代を学ぶことから、日本そのものを学ぶことに移った。かつて日本を通して台湾を現代化に導くことを心掛けた留学生の理想が皇民化運動の下で、変わり果てていってしまった。「奔流」の主人公の「私」、伊東春生、「鏡」の洪秋文など、王昶雄の筆になる留学生たちはより一層日本人に近づくことを目標とし、自分の価値を確認しようとする。「奔流」の主人公が植民地出身に劣等感を感じ、四国や九州出身だと言いふらす。そんな自分に矛盾を感じながらも、日本人になりきるためにやめることもなく、日本を親鳥になぞらえ、自分がその慈愛に憧れているだけにすぎないと弁解した。皇民化運動の下の留学生は台湾人としてのアイデンティティが失われていき、その代わりに日本人になることはアイデンティティを取得する前提となった。皇民化運動の高潮期に書かれた「奔流」、「鏡」はこのような留学生の苦しみを物語ったものである。

以上、留学体験の作品を通して、時代に流された留学生の心境変化が見られる。彼らを悩ませる問題の数々は、台湾社会における問題を反映したものであった。先覚者としての彼等はまず台湾の民衆を覚醒させなければならぬ使命感を感じはめた。その使命を果たせるために、民族運動や政治運動に力を注いだ。後、社会環境の厳しくなるにつれ、文学での活動に集中するようになった。作者たちは自分自身を含め、封建社会の因習で苦しめられた人々を語り、台湾社会に改新を促そうとした。

結語

日本統治期に活躍した台湾人作家の中では、日本に留学経験のある人は少なくなかった。しかし、留学体験を作品に取り上げる者は1930年代前半に東京の台湾留学生によって「台湾芸術研究会」が結成されるまで、殆どいなかった。初期の活動が台湾民衆の啓蒙と政治問題を中心にしていて、文学はそれらの目的を達成するための一つの手段に過ぎなかった

のである。

1930年代に入ると、文学の芸術性に関心を持ちはじめ、個人を考える余裕もでき、次第に作品も多彩になってきた。中でも、留学体験の作品はもっとも特色のあるものである。「台湾芸術研究会」の前身「東京台湾文化サークル」が検挙によって活動する前に破壊された教訓を生かして、張文環、蘇維熊、巫永福らを中心として結成された「台湾芸術研究会」が再びの弾圧を避けるために、またより多くの同志を得るために、温和路線を選び、1933年機関誌として『フォルモサ』が発行された。創刊号では、巫永福の「首と體」、張文環の「落蕾」が掲載されている。帰郷したくない留学生、実らなかった恋を忘れるために日本に留学する台湾青年、どちらでも新鮮なテーマであった。

学業を無事に終えた留学生たちが希望を持って台湾に帰る。しかし、統治者によっての就職の差別は彼らの学問を活用する場が少なかった。それによって、台湾の民衆に盲目なほど崇拜されてきたお医者様は一番理想的な職業とされてきた。その次、近代社会に欠かせない弁護士も出世ランキングの中の一員である。大正12年度(1923年)の『台湾総督府学事年報』によると、1923年の大学及び専門学校の在学者は合計165人がある。民族運動が一番盛んな時期でもあるため、政治経済学の在学者が40人、法律学が30人、そして一番多くのはやはり医学の55人であった。これに対して文学の在学者はわずか6人しかいなかった。⁽⁴³⁾このような医学に偏る状況が変わることなく、続いていた。いくら才能があっても、失業は失業である。人々の留学生を見る目が厳しくなってきた。真面目に勉強したかどうかは問題ではなく、重要なのは何を勉強したかということになる。

経済的安定によって、子弟に留学させる余裕のある家庭が増えていく。30年代に入ると、留学生が珍しく思われる時代いよいよ終りを迎えることになった。そして、いくらぼんくらでも、金を掛けて日本に送り、医学士や法学士の学位を持って帰ってくれればと思う人が増えてくることによって、内地留学生の質が悪くなっていく方向に進んでいった。勉強もせず、遊びに没頭する人達が留学生のイメージを悪くしていくのは当時の台湾留学生の中では一つ深刻な問題であった。

留学経験者の作家たちの体験談を通じて、台湾の新しい世代が統治者の日本、故郷の台湾、そして作者個人についての考え方の変化をうかがえる。今度の考察で、留学生のアイデンティティの形成と変化がわかる。異民族に統治されることになり、民族意識が目覚め、台湾人としてのアイデンティティが形成しはじまった。時間が経つにつれ、日本の近代教育を受けてきた留学生が台湾人を強く意識することが薄くなって行った。そして、皇民化運動によって、台湾人という意識を捨て、日本人として新しい認識が生まれた。本論は留学事情を考察していくことによって、台湾の先導に立った留学生が直面する問題を割り出し、時間の流れの中で留学生の心境の変化を分析してみた。しかし、留学に関する作品の数が多くないため、限られている視野の中でしか分析できなかったことがとても残念だと思っている。

〈注〉

- (1)『台湾総督府警察沿革誌』、復刻版、台湾総督府警務局編(昭和8～19年)P.24
- (2)大沼八郎、「日本統治下における台湾留学生－同化政策と留学生問題の展望－」
- (3)『台湾教育沿革誌』では、日本への渡航日は1895年10月29日と記載されている(『台湾教育沿革誌』P.34)。帰島についての記載は見当たらないが、1896年1月1日の「芝山巖事件」の後、1月9日に書かれた民政局警保課の警部心得西萬壽良の検視状によると、事件後、犠牲となった学務部の職員たちの死体を朱俊英、柯秋潔たちに確認させたという記載があるため(『台湾教育沿革誌』P.30)、恐らく、芝山巖事件の前に柯秋潔、朱俊英二人は既に帰島していたと思われる。船に搭乗する時間を除いて、日本に1ヶ月あまりしか滞在しなかったことになる。
- (4)大沼八郎、「日本統治下における台湾留学生－同化政策と留学生問題の展望－」
- (5)『台湾教育沿革誌』P.34
- (6)大沼八郎、「日本統治下における台湾留学生－同化政策と留学生問題の展望－」
- (7)『帝國主義下の台湾』矢内原忠雄、P.156
- (8)『台湾総督府学事年報』第10年－第22年(明治44年度－大正11年度)

- (9)『台湾教育沿革誌』P.74
- (10)『帝國主義下の台湾』、P.156
- (11)『台湾総督府学事年報』第23年—第36年、『台湾学事一覽』昭和13—16年
- (12)六編の小説の発表順番は「到異郷」1926.4.18、「弟兄」1926.8.22、「黄昏的蔗園」1926.9.26、「加里飯」1927.1.2、「秋菊的半生」1928.7.15、「青年」1930.1.1、いずれも『台湾民報』に発表されたものである。
- (13)『楊雲萍・張我軍・蔡秋桐合集』張恒豪主編、前衛出版社、P.31
- (14)「附記：兄弟在前載在民報的小説、到異郷因太不滿意、所以不願續載。以上。」これは1926.8.22第119号『台湾民報』P.15、同じ楊雲萍の作品——小説「弟兄」の後に付記の形で、作者が入れた説明文である。
- (15)『楊雲萍・張我軍・蔡秋桐合集』、P.36
- (16)前掲、P.45
- (17)前掲、P.36
- (18)『日本統治期台湾文学集成5－台湾純文学集一』星名宏修編、緑蔭書房、P.14
- (19)前掲、P.13
- (20)前掲、P.16
- (21)『日抛時期台湾作家論—現代性、本土性、殖民性』陳建忠著、五南圖書、P.140
- (22)『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集』第四卷、P.63
- (23)『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集』第四卷、P.67
- (24)前掲、P.68－69
- (25)前掲、P.276
- (26)『台湾文芸』第一卷第三号、P.3－4
- (27)『台中県文学發展史』施懿琳・許俊雅・楊翠著、台中県立文化中心、P.173
- (28)『暖流寒流』、P.9
- (29)前掲、P.26
- (30)前掲、P.110
- (31)前掲、P.55、56
- (32)『陳垂映集』第四卷、P.75
- (33)『陳垂映集』第二卷、P.323
- (34)王昶雄の日本に渡る年については、1991年前衛出版社から出された台湾作家全集・短篇小説卷／日抛時期シリーズの『翁鬧・巫永福・王昶雄全集』では、1928年と記載されているが、2002年に出版された『王昶雄全集』第9

冊に収録された「王昶雄生平著作年表初編」では1933年と記載されている。ここでは、王昶雄の経歴について、すべて「王昶雄生平著作年表初編」に基づいている。

- (35) 王昶雄、「妙語解頤的硬漢——張文環逸聞逸事」、『王昶雄全集』第三冊、P. 134
- (36) 『台湾文学』第三卷第3号、P.129
- (37) 前掲、P.104
- (38) 前掲、P.110
- (39) 前掲、P.117
- (40) 『王昶雄全集』CD映像資料、「鏡」原稿、P.23～P.24
- (41) 前掲、P.39
- (42) 前掲、P.60
- (43) 本文の参考資料の表5を参照。

《参考資料》

表3 留学体験作品一覧

作 品	作 者	出 所	年 月	言 語
「到異郷」	楊雲萍	『台湾民報』第101号	1926.4	中国語
「弟兄」	楊雲萍	『台湾民報』第119号	1926.8	中国語
「咖哩飯」	楊雲萍	『台湾民報』第138号	1927.1	中国語
「首と体」	巫永福	『フォルモサ』創刊号	1933.7	日本語
「蜘蛛」	吳天賞	『台湾文芸』2-3	1935.3	日本語
「山茶花」	巫永福	『台湾文芸』2-4	1935.4	日本語
「哀春譜」	陳春映	『台湾文芸』2-5	1935.5	日本語
「残雪」	翁闈	『台湾文芸』2-8, 9	1935.8	日本語
「父の要求」	張文環	『台湾文芸』2-10	1935.9	日本語
「失踪」	陳瑞榮	『台湾新文学』1-3	1936.4	日本語
「暖流寒流」(長編)	陳垂映	『暖流寒流』台湾文芸聯盟出版	1936.7	日本語
「友情——『青年時代』一章」	朱南化	『台湾新文学』1-8	1936.9	日本語
「初恋」	黃有才	『台湾新文学』2-5	1937.6	日本語
「鏡」	王昶雄	『王昶雄全集』第一冊	未発表	日本語
「垂細垂的孤兒」(長編)	吳濁流	『垂細垂的孤兒』	1962	中国語

表4 留学生が登場する作品

作 品	作者	出 所	年 月	言語
「彼女は何処へ」	謝春木	『台湾』第3年第4号	1922.7	日本語
「榮歸」	陳滿盈	『台湾新民報』322、323号	1930.7	中国語
「叔父!」	凌浪生	『台湾新民報』328-330号	1930.8-9	中国語
「落蕾」	張文環	『フォルモサ』創刊号	1933.7	日本語
「興兄」	蔡秋桐	『台湾文芸』2-4	1935.4	中国語
「水牛」	楊達	『台湾新文学』創刊号	1935.12	日本語
「紳士への道」	藍紅緑	『台湾新文学』1-5	1936.6	日本語
「田園小景スケッチ・ブックより」	楊達	『台湾新文学』1-5 (前半のみ、後半禁止)	1936.6	日本語
「魔の力」	頼弘明	『台湾新文学』1-7	1936.8	日本語
「脱穎」	朱點人	『台湾新文学』1-10	1936.12	中国語
「台湾の女性」	呂赫若	『台湾芸術』1-3	1940.5	日本語
「山茶花」(長編)	張文環	『台湾新民報』連載	1940	日本語
「午前5の崖」	龍瑛宗	『台湾時報』23-7	1941.7	日本語
「過渡期」	王育徳	『翔風』24	1942.9	日本語
「地方生活」	張文環	『台湾文学』2-4	1942.1	日本語
「奔流」	王昶雄	『台湾文学』3-2	1943.7	日本語
「玉蘭花」	呂赫若	『台湾文学』4-1	1943.12	日本語
「清秋」	呂赫若	小説集『清秋』	1944	日本語
「山川草木」	呂赫若	『台湾文芸』創刊号 (台湾文学奉公会発行)	1944.5	日本語
「土の匂ひ」	張文環	『台湾文芸』1-3	1944.7	日本語

表5 日本留学者学修科目別表(大学及び専門学校在学者)(『台湾総督府学事年報』大正12年度一昭和12年度による)

	文学	法学	医学	商学	政治経済 (経済)	理・工・農学	その他	合計
1923年	6	30	55	14	40	12	8	165
1924年	5	23	59	14	29	8	7	145
1925年	5	27	55	17	22	15	9	150
1926年	11	52	82	20	29	20	10	224
1927年	17	89	137	29	54	30	16	372
1928年	18	101	161	26	58	39	14	417
1929年	18	81	144	24	42	32	13	354

1930年	24	79	136	32	59	37	11	378
1931年	20	83	229	31	31	37	13	444
1932年	14	113	261	31	48	35	12	514
1933年	18	123	243	26	51	27	15	503
1934年	31	237	348	57	72	63	25	833
1935年	40	241	420	60	72	45	30	908
1936年	27	204	507	71	66	45	32	952
1937年	29	196	619	83	70	54	40	1091

《参考文献》

〔文学関係〕

『台湾青年』・『台湾』・『台湾民報』・『台湾新民報』1920 - 1931年、復刻、景印叢刊五十種；第十二種、東方文化書店（台湾）

『フオルモサ』・『台湾文芸』・『台湾新文学』・『文芸台湾』、『台湾文学』復刻、景印叢刊第29種、台湾新文学雑誌、東方文化書店（台湾）

『日本統治期台湾文学 - 台湾人作家作品集』1 - 5・別集、中島利郎等編、緑蔭書房、1999年

『台湾小説集』日本植民地文学精選集2、1943年、ゆまに書房、2000年（復刻）

『暖流寒流』日本植民地文学精選集35、陳垂映著、1936年、ゆまに書房、2001年（復刻）

『台湾長篇小説集二』日本統治期台湾文学集成2・3、下村作次郎編、緑蔭書房、2002年

『日本統治期台湾文学研究文献目録』中島利郎・河原功・下村作次郎・黄英哲編、緑蔭書房、2000年

『台湾作家全集・短篇小説卷／日據時代』張恆豪編、前衛出版、1991年（台湾）

『張文環全集』張文環著、台中県文化中心、2003年（台湾）

『王昶雄全集』王昶雄著、台北県文化中心、2003年（台湾）

『兩岸文学論集』施淑著、新地文学出版社、1997年（台湾）

『日據時期台湾小説研究』許俊雅著、文史哲出版社、1999年（台湾）

『台中県作家與作品論文集』路寒袖主編、台中県立文化中心、2000年（台湾）

『我的風霜歲月——巫永福回憶錄』巫永福著、望春風文化、2003年（台湾）

『日據時期台湾作家論：現代性・本地性・殖民性』陳建中著、五南圖書出版、2004年（台湾）

「張文環の東京生活と『父の要求』」野間信幸著、『野草』第54号、1994.8.1

「荊棘之道旅日青年的文學活動與文化抗爭——以福爾摩沙系統作家為中心」柳書琴著、2000年

〔歴史・文学史・教育関係〕

『台湾社会運動史』台湾総督府警務局編、1939年、『台湾総督府警察沿革誌第2編 領台以後の治安状況』中巻の復刻、龍溪書舎、1973年

『新しい台湾：独立への歴史と未来図』王育徳・宗像隆幸著、弘文堂、1990年改訂版

『台湾文学史綱』葉石濤著、文学界雜誌社、1987年（台湾）

『日據下台湾政治社会運動史上・下』葉榮鐘著、晨星出版、2000年（台湾）

『台湾教育沿革誌』台湾教育会編、1939年。復刻、青史社、1982年

『帝國主義下の台湾』矢内原忠雄著、岩波書店、1988年

『日本植民地下における台湾教育史』鍾清漢著、多賀出版、1993年

「日本統治下における台湾留学生－同化政策と留学生問題の展望－」大沼八郎

『国立教育研究所紀要』第94集、1978年